

このダバオに住み着いて5年になり、この地においてフルーツや水産物の冷凍食品の工場を経営しております。

又昨年3月にミンダナオ日本人商工会議所(JCCM)をミンダナオの共存共栄を旗印に仲間と一緒に設立し、この島についての知識を深めているところであります。

イスラムの人々との交わりは仲間であり、同郷の先輩である天野氏(JCCM 副会頭)の導きがきわめて大きい。事業においても天野氏の仲介により、JCCMの仲間であり、ミンダナオにおけるイスラムの偉大なリーダーあるバグラス氏の農園とパートナー関係を結び、信頼関係を深めており、今後の事業展開の基軸になることは間違いない。なぜならばパートナーとして、こんなに信頼が置ける相手は他にはいないと確信しているからである。



中尾純啓氏

話が前後になりましたが、私もこの地に来た時はイスラムと聞いただけでテロや紛争を連想し、近寄ったら身に危険が及ぶものと心底思っておりました。ほんの一握りの行動が全体のイメージを作り上げ、そのおかげで経済や教育からも取り残されてしまい、その結果 貧困が進み、十分な教育施設、教育指導者も得られない状態が続いております。

しかし彼らの反政府運動の元凶は60年代から70年代、この国の政府高官と日本の商社の森林伐採が彼らの生活権を奪ったことであり、そのことは心に留めておかなければならないことではないでしょうか。

この度、パグラストウンのイスラムの学校より、MKDに2人の学生を留学生として受け入れ、将来のイスラム地域の教育指導者として、育成するために網代会長がイスラム教育基金を設けられたことは素晴らしい事であると思います。1人でも多くの学生が教育指導者として、育つことを願い、一人でも多くの方々のご支援を賜りたい。

最後にこの地域の子供たち、学生と触れてみると、のびやかな中に純粹さ、素直さがあふれ、ふと自分が癒されていることを感じます、将来私は孫や日本の子供たちのパートナーとして、なって欲しいとひそかに思っております。今支援していることは孫への最高の贈り物だと、捉えております。

(文/中尾純啓)